

シカゴ大学実験学校におけるデューイ教育思想の継承と 美術教育の今日的意義

—ジーナ・アリシア教諭による講演を踏まえて—

中村 和世

本稿は、学習指導要領の次期改訂に向けて文部科学省から出された方向性を踏まえて、わが国の学校教育におけるこれからの美術教育のあり方を考えるために、シカゴ大学実験学校で行われている21世紀型学習について検討することを目的とする。検討に際しては、2016年7月2日・5日に広島大学学習システム促進研究センター（RIDLS）主催で開催された「アメリカの教育改革と学校教育の再設計—シカゴ大学実験学校の21世紀型学習—」をテーマとした講演会において、ジーナ・アリシア教諭の講演「芸術による体験学習」で紹介された事例を、デューイの教育思想との関連性を踏まえながら分析した。シカゴ大学実験学校の美術教育は、①体験と結びついた美的リテラシーの育成を図る学習の推進、②リフレクションが伴う創造的思考を通して思想・感情の育成を図る学習の推進、③社会との有機的な接続を図る学習の推進、から特徴づけることができ、結論では、教育課程企画特別部会の「論点整理」に示された教育課程の構造的な見直しの柱となる3つの資質・能力である「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「人間性や学びに向かう力等」との関連において、シカゴ大学実験学校の美術教育の今日的意義を考察した。

キーワード：図画工作・美術科教育、シカゴ大学実験学校、21世紀型学習、ジョン・デューイ

Inheritance of Dewey's Philosophy of Education in Art Education at the University of Chicago Laboratory Schools and Today's Significance: Critical Review of Gina Alicea's Speech

Kazuyo Nakamura

This paper aims to investigate 21st Century Learning conducted at the University of Chicago Laboratory Schools in order to contemplate the future of art education in Japanese school education based on the direction given by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology for the next revision of the course of study guidelines. This study analyzed a case introduced in Gina Alicea's lecture "Experiential Learning Through Art" based on its relationship to Dewey's educational philosophy, speech given at the lecture conference themed "American Educational Reform and Redesign of School Education—21st Century Learning

at the University of Chicago Laboratory Schools” hosted by the Research Initiative for Developing Learning Systems (RIDLS) at Hiroshima University on July 2 and 5, 2016. Art education at the University of Chicago Laboratory Schools can be characterized by (1) promotion of learning to cultivate aesthetic literacy linked to experience, (2) promotion of learning to cultivate ideas and emotions through creative thinking with reflection, and (3) promotion of learning to achieve an organic connection with society. In conclusion, this study has examined the contemporary significance of art education at the University of Chicago Laboratory Schools in relationship with the three qualities and abilities “individual knowledge/skills,” “thinking skills, judgment skills, and expression skills,” and “ability to face humanity and learning,” which are the pillars for structural review of educational curriculum indicated in the “discussion points organization” of the Curriculum Planning Special Committee.

Keywords: Arts and Crafts and Art Education, University of Chicago Laboratory Schools, 21st Century Learning, John Dewey

1. 目的と方法

本稿は、シカゴ大学実験学校の美術教育においてジョン・デューイ（1859-1952）の教育思想がどのように継承され実践開発が進められているのかについて検討するとともに、次期改訂の学習指導要領の方向性を踏まえながら、わが国の学校教育への示唆を得ることを目的とする。検討に際しては、2016年7月2日・5日に広島大学学習システム促進研究センター（RIDLS）の主催で開催された講演会である「アメリカの教育改革と学校教育の再設計ーシカゴ大学実験学校の21世紀型学習ー」において、ジーナ・アリシア教諭が発表した「芸術による体験学習」の内容、同教諭に対するインタビューによって得られた情報、並びに、The University of Chicago (2015)『シカゴ大学実験学校小学校ハンドブック』など教育課程に関する情報が含まれた資料を活用する。

2. シカゴ大学実験学校とデューイ教育思想の継承

シカゴ大学実験学校では、今日に引き続き、創設者であるデューイの教育精神を継承し、デューイが当時の教師とともに取り組んだ「学校は、個人の資質・能力を開発したり彼等自身のニーズを養い育てたりすると同時に、いかにして協力的な共同社会を築くことができるのだろうか」という課題に取り組み、21世紀の状況を踏まえながら、独自のカリキュラム開発を行っている。

美術教育に関しては、デューイが校長を務めた時代と同じく、美術科部門（the Fine Arts Department）が設置されており、12人の専科教員が保育所・幼稚園、小学校、中学校、高等学校の美術教育を担当している。デューイにとって、教育とは、知識の量ではなく、生まれつきの粗野な衝動や本能を、社会的生活を通して人間らしいものに教化し、自律的に成長し続けていく力を培うことであり、この

立場から芸術は人格形成を目的とする教育の手段として捉え直され、今日でも、そのような教育観のもと、美術は必修として位置づけられ、教育課程において重要な役割を担っている。

デューイによれば、子どもの衝動・本能は、それを起点に展開する子どもの自己活動と、人類の創造的知性の所産である芸術との相互作用を通して、知的及び情緒的な発達に向けて導かれるべきものであり、今日の実験学校の美術教育においても、子どもの自己活動を中心に据えた体験と結びつけて学習を展開することが重視されている。

美術科部門の主任であるアリシア教諭は、シカゴ公立小学校における約11年間の教職経験を経て、2007年からシカゴ大学実験学校小学校で専科教員として美術を担当し、2012年から美術科部門の主任を務めている。

美術科部門では、デューイが生きていた時代の美術教育の伝統が伝えられ、今日にわたって教員達の間で受け継がれているという。アリシア教諭の発表では、彼女が実践しているデューイの教育信条として以下の3点が示されている。

- ①体験学習や実地学習は、子どもが最もよく学び覚える方法である。
- ②活動は、子どもの生活や興味とつながっている必要がある。
- ③活動は、子どもによりよい市民になることや、他者と協力することを学ぶことに取り組みさせる。

以下では、アリシア教諭の発表で紹介された教育実践について、デューイ教育思想との関連性を考察し、次期改訂の学習指導要領で示された方向性と同じく、人間性の育成を目的とした美術教育が今日のシカゴ大学実験学校においてどのように展開されているのかを検討する。

3. シカゴ大学実験学校の美術教育の特徴 (1) 体験と結びついた美的リテラシーの育成を図る美術教育の推進

デューイにとって、芸術とは、言葉と同様、習得すべき社会的価値を備えた言語であり (Dewey, 1934, p.106)、デューイの時代の実験学校において、形や色、構成、表現様式等を含む造形要素・原理の内容が教育課程において系統的に組織化されていたように(中村, 2005)、今日においても、子どもが自分と社会・世界とのかかわりに関する知覚や認識を広げたり深めたりするために、造形要素・原理やイメージを対象とする美的リテラシーの育成が図られている。

アリシア教諭が実践しているデューイの教育信条にも示されているように、実験学校の美的リテラシーの学習指導に特徴的な点は、児童・生徒の体験と結びつけて進められていることである。そのような特徴は、特に、①小学校4年生を対象としたシカゴ市中心街にあるハロルド・ワシントン・ライブラリー等へのフィールド・トリップを通して行われた建築の学習、②中学校2年生を対象として行われたシカゴ大学の周辺にあるビクトリア調の建築とフランク・ロイド・ライト(1867-1959)のロビー・ハウスの様式に関する比較学習、③キャンパスにある建築の写生を基にした描画学習などに見出すことができる(アリシア, 2016, p.20, p.27)。

シカゴ市中心街へのフィールド・トリップを通じた学習では、シカゴ建築財団のロビーで、シカゴ市中心街の立体的な地図をみることから始まり、戸外において著名な建築物を目の前にして写生したり中を通ったりしながら行われ、実際に自分が目にしたものと結びつけながら、ペディメント、コラム、柱頭、アクロテリアのような、建築の専門用語が学ばれている。

シカゴ大学キャンパスで行われた建築の学習では、生徒の生活圏であるハイドパーク地

区に多くあるビクトリア調の建築物と、近郊のフランク・ロイド・ライトによるロビー・ハウスを利用して、建築様式の比較がなされている。ワークシートを用いて、立地環境、材料、屋根の形、窓やドアの形、装飾の点から、外装と内装をよく観察したり写生をしたりして比較が行われ、それぞれの建築様式の独自性や両者の相違点が話し合われている。

キャンパスにある建築物の写生を基にした描画学習では、遠近法が中心に学ばれ、4つ切りサイズの画用紙に、画面半分を鉛筆による写実的な素描で、残りの半分を水彩による自由な想像的表現で構成して描いている。実験学校の児童・生徒の保護者の約60パーセントはシカゴ大学職員であり、家族との思い出のある建築物を1つ選んで写真を撮り、6週間を費やして、機械的な写生ではなく、家族に対する思いやイメージが効果的に伝わるよう、写実的な描画と想像的な描画の組み合わせによる画面の内容や構成を工夫している。学習の最終段階では、造形の要素・原理に着目して、グループによる批評会が行われている。アリシア教諭の発表では、以上のような学習を通して、生徒達が、奥行きや明暗を自分のイメージを表すためにどのように効果的に用いるのかを理解したことが報告されている。

デューイの時代から行われているそのような美的リテラシーの学習に加えて、今日の実験学校では、視覚的イメージで溢れる情報化社会に即した21世紀型のビジュアル・リテラシーに焦点を当てた学習が中学校段階から行われている(アリシア, 2016, p.22, p.29)。そのようなリテラシーは、インターネット等から得られる視覚情報を対象とし、「必要とされる画像を定義する」、「画像を見つける」、「画像を解釈・分析する」、「画像を評価する」、「画像を効果的に使用する」、「視覚メディアを創造する」、「画像を倫理的に使用し引用する」の8つのスキルから構成され、これらを身に

付けさせることで、生徒を情報化社会における視覚的イメージの受け身的な消費者から、批判的に分析し解釈できる創造者へと育成することが図られている。

（２）リフレクションが伴う創造的思考を通して思想・感情の育成を図る美術教育の推進

デューイが捉える芸術経験とは、リフレクションが伴う創造的思考の働きを通して、行為者の思想・感情と材料等の物質的素材の両方が質的に変化する教育的プロセスであり、実験学校の美術教育においては、創造的思考を重視した学習指導が行われている。リフレクションが伴う創造的思考によって導かれる経験は「熟慮的经验」とも称され、①困惑、混乱、疑問、②推測的予想、試験的解釈、③実験、点検、探索、分析、④仮説の精密化、⑤行動による仮説の確認、の特徴を備えている（デューイ、2014、pp.239-240）。アリシア教諭の教育実践では、児童・生徒の生活の中から生じた疑問や興味から学習を始めることが基本とされ、熟慮的经验の特徴を備えた学習を通して、児童・生徒の思想・感情を洗練していくことが目指されている。

熟慮的经验の諸特徴が特に見出される教育実践の事例としては、①中学校2年生を対象としたギャラリー特別展企画のプロジェクトや、②小学校3年生を対象とした恐竜プロジェクトが挙げられる。

ギャラリー特別展企画のプロジェクトは、生徒に興味のあるテーマに即した特別展をデザインさせることを通して、生徒の思想・感情を発展させるとともに造形的に伝達する力を伸ばすことがねらいとされている（アリシア、2016、p.23、p.30）。学習の始めの段階では、ギャラリーへのフィールド・トリップを通して、「キュレーターの仕事にはどのようなことが課されているのか」を生徒自身に発見させている（①困惑、混乱、疑問）。次の学習段階では、「あなたは、観客に何を伝達したい

ですか?」、「そのアイデアをサポートするために、どのイメージをあなたは選びますか?」という生徒にとっての課題をキュレーターの仕事とつなぐ「本質的な問い」を中心に、オリジナルの展示会を構想させ（②推測的予想、試験的解釈）、キュレーターの仕事に取り組む際の課題として、「アイデアを研究する」、「テーマをサポートする芸術家を選ぶ」を与えることで、探索・分析活動を深めさせている（③実験、点検、探索、分析）。続けて、「展示会モデルを設計する」、「モデルをつくる」、「研究論文を書く」の3つの活動では、生徒は、自ら設定したテーマに即した展示会の完成度を高めていき（④仮説の精密化）、クラスにおける展示会モデルの批評会を通してモデルの効果について確かめる機会が与えられている（⑤行動による仮説の確認）。生徒が制作したモデルのテーマには、「浪費」、「数学的な美」、「ニュー Yorker・イラスト・アート」、「ピーター・ブルームの作品展」、「ごめんなさい」等があり、生徒一人ひとりが各自の興味を追求したことが分かる。

同様に、恐竜プロジェクトに関して、学習は児童の恐竜に対する強い興味から始められ、（①困惑、混乱、疑問）、シカゴ大学キャンパスにある化石研究所を訪問して専門家であるポール・セレノ教授と交流しながら、恐竜の骨を実際に自分の目で見たり触ったりしながら学ぶ機会が与えられている。次の学習段階では、協力してオスとメスのラージサウルスの2つの頭部を描き、エポキシ樹脂粘土を使って恐竜を制作している。制作では、恐竜の骨を覆う皮膚をつくるために、エポキシ樹脂粘土をどのように使うのかを学んで、うろこ、羽毛、絵の具を用いて、恐竜を完成させる方法を話し合い（②推測的予想、試験的解釈、③実験、点検、探索、分析）、自分が持っている恐竜のイメージに合った表現手段を精緻化し（④仮説の精密化）、イメージの実現に取り組んでいる（⑤行動による仮説の確認）

(アリシア, 2016, p.24, p.31)。

(3) 社会との有機的な接続を図る美術教育の推進

デューイにとって、学校とは理想とする社会の萌芽となるべき場所であり(デューイ, 2002, p.77), 今日に引き続いて、実験学校では、学校生活を通して子どもをより民主的な共同社会の一員へと導き訓練することを目的として、学校と社会との有機的な接続を通して、社会における芸術の公共的な働きに着目した学習が進められている。アリシア教諭の教育実践においても、美術教育を通して「よりよい市民」を形成することや他者と協力できる力を育成することが目指されている。

社会との接続を図る美術教育は日本においても蓄積があり、アリシア教諭による発表の中で紹介された地域社会にある歴史的建築物の訪問・見学を通して歴史を踏まえながら美術文化を学ぶことや、街づくりや地域共同体の活性化などを目的とするパブリック・アートの学習を通して、社会における芸術の公共的価値を認識させる学習は、日本の学校でもよく行われている。

アリシア教諭の発表事例の中で日本ではまだ例が少ない学習のあり方としては、①小学校4年生を対象とした大統領ライブラリーの立体モデル制作、及び、②中学校1年生を対象とした社会正義をトピックとしたポスター制作が挙げられる(アリシア, 2016, p.21, p.28)。

大統領ライブラリーの立体モデル制作において着目されるのは、①社会において建築造形が市民生活の向上を図るためにどのように機能しているのかを授業のテーマとしている点、及び、②児童のアイデアを学校の壁を越えて実社会におけるアクションへとつなげている点である。モデル制作において、児童は、「建築家は何について考える必要がありますか?」を問いとして、「ライブラリーが市民に

とってどのように機能すべきか」、「機能に合った建築のフォルムはどうあるべきか」を考えながら、自分のビジョンを立体モデルにして表している。児童から出された機能には、図書館、博物館、教室、シアター、カフェ、すべての人が楽しめる必要性、持続できるエネルギーの効率性、心地よさ等がある。

立体モデルは展示会を通して外部と共有されるほか、オバマ財団から直接のインタビューを受けることで実社会へのアクションへと結び付けられている。

社会正義をトピックとしたポスター制作では、アメリカの公民権運動の中で活躍したゴードン・パークス(1912-2006)が取り上げられ、人種差別や社会不正等の問題に対する写真家としての姿勢と合わせてパークスの写真作品が学ばれ、アメリカの民主主義社会の隠れた問題に対して生徒が気づきを深め自らの考えを発展させる学習が行われている。生徒は、シカゴ大学キャンパスに新しく創設された芸術ホールでオリジナルのパークスの写真作品13点を目の前に、彼が写真を通して映し出した人種差別、不寛容、貧困の問題について話し合い、自らが追究したい社会正義のテーマを選び、デザインの要素や原理、構成を工夫してポスター制作を行っている。生徒が選んだテーマには、平和、非暴力のプロテスト、平等、銃による暴力、動物の権利、環境等があり、アリシア教諭の発表で紹介のあった生徒作品からは、抽象的なレベルで生徒が問題を捉えるのではなく、自らの日常生活とのかかわりにおいて問題意識を深めていることが読み取れる(アリシア, 2016, p.22, p.29)。そのような学習を通して、アリシア教諭の言葉で表された「よりよい市民」として、実社会に存在する問題に対して主体的にかかわり状況改善のためにアクションを起こす素地となる資質や能力が育まれていると思われる。

4. 考察

学習指導要領の次期改訂に向けて教育課程企画特別部会から出された「論点整理」には、教育課程について、「何を知っているか」という知識の内容を体系的に示した計画にとどまらず、「それを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」までを視野に入れて、①個別の知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③人間性や学びに向かう力等の資質・能力を柱としながら、「社会に開かれた教育課程」を目指して構造的な見直しを行うことが示されている（文部科学省，2015a, p.10）。「図画工作，美術，芸術（美術，工芸）」に関しては、それら3つの柱に沿って教科で育てたい資質・能力の明確化を進めるとともに、わが国の児童・生徒に見られる以下の課題に対して対処することが求められている（文部科学省，2015b, p.98）。

- ①作品の表現の特徴や意図が十分に捉えられない。
- ②造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるための視点である〔共通事項〕については、一部課題がある。
- ③美術の基礎的な能力と育成する資質・能力との関係が曖昧な指導が行われている。
- ④生活や社会において美術がどのように役立っているのか十分に認識されていない。
- ⑤美術文化の継承と創造への関心を深める学習が十分ではない。

シカゴ大学実験学校の美術教育は、次期改訂の学習指導要領が目指す教育と同じ方向性にあり、以下の点から今日的意義を見出すことができる。

一つ目は、児童・生徒の体験と結びつけながら美的リテラシーの育成が図られることによって、単に頭の中だけの知識にとどまらず、児童・生徒が自己の生活の中で活用し新しい

意味を生み出すためのリテラシーが身に付けられていることである。上記②の課題に示されるように、わが国の「図画工作，美術，芸術（美術，工芸）」においては、リテラシーにかかわる〔共通事項〕の視点からの学習が十分ではなく、〔共通事項〕の内容組織をさらに検討することや、絵画，彫刻，建築，メディア・アーツ等，領域ごとの専門用語を教育課程において組織化するとともに、児童・生徒の体験と結びつけた学習の開発を図る必要性が示唆される。

二つ目は、児童・生徒の思想・感情の育成に向けたリフレクションが伴う創造的思考の習慣を養うことをねらいとした学習が開発されていることであり、そのような学習は、課題①や課題③に対処するために具体的なあり方を提示しており有意義であると思われる。デューイによって明確化された、①困惑，混乱，疑問，②推測的予想，試験的解釈，③実験，点検，探索，分析，④仮説の精密化，⑤行動による仮説の確認，による思考方法は、美術に本質的な知識・技能を使って、思考・判断しながら、自己にとっての意味や価値を、作品制作や作品鑑賞を通して、認識したり創り出したりすることに有効に働く。そのような思考方法を組み込んだ学習を進めることで、作家の思考を読み取る力が身に付き、作品の表現の特徴や意図を捉える力の向上につながるとともに、次期改訂の学習指導要領の方向性に示された、①個別の知識・技能，②思考力・判断力・表現力等，③人間性や学びに向かう力等の資質・能力が育成される学習の実現が期待できると思われる。

三つ目は、社会との有機的な接続を図ることを通して、美術の公共的な機能に関する認識や、社会に対して美術の立場からアクションを起こせる素地を培うことを視野に入れている点である。そのような美術教育は、「図画工作，美術，芸術（美術，工芸）」の課題④や課題⑤と関連して、生活や社会における美術

の役割に対する認識不足の解消や、社会における美術文化の継承と創造を認識させることに役立ち、次期改訂の学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」を実現させるために好例を示していると思われる。

参考文献

- アリシア, G. (2016) 「芸術による体験学習」『アメリカの教育改革と学校教育の再設計ーシカゴ大学実験学校の21世紀型学習ー』(広島大学学習システム促進研究センター(RIDLS)講演会シリーズ No.16 資料), pp.19-32。
- Dewey, J. (1934) *Art as Experience*. George Allen & Unwin.
- デューイ, J 著 (市村尚久訳) (2002) 『学校と社会／子どもとカリキュラム』講談社学術文庫, 第6刷 (Dewey, J. (1900) *The School and Society*. The University of Chicago Press.)。
- デューイ, J. 著 (松野安男訳) (2014) 『民主主義と教育(上)』岩波文庫, 第31刷 (Dewey, J. (1916) *Democracy and Education*. Macmillan Company.)。
- 文部科学省 (2015a) 「教育課程企画特別部会論点整理」,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm (2016年11月1日閲覧)。
- 文部科学省 (2015b) 「教育課程企画特別部会論点整理補足資料(3)」,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm (2016年11月1日閲覧)。
- 中村和世 (2005) 「デューイ実験学校における芸術教育の理論と実践(2)ーリリアン・クッシュマン教諭による実践を中心にー」『大学美術教育学会誌』第37号, pp.295-302。
- 中村和世 (2015) 「アメリカ美術教育の現在(1)ーシカゴ大学実験学校の例」『教育美術』(880), pp.52-55。

The University of Chicago (2015) *The University of Chicago Laboratory Schools The Lower School Handbook 2014-2015*. The University of Chicago.

著者

中村 和世 広島大学大学院教育学研究科